

樋口一葉

十三夜





十三夜



## 上

例<sup>いつも</sup>は威勢よき黒ぬり車の、それ門<sup>かど</sup>に音が止まつた娘  
 ではないかと両親<sup>ふたおや</sup>に出迎<sup>しよんぼり</sup>はれつる物を、今宵は辻より飛<sup>とび</sup>  
 のりの車さへ歸して悄<sup>しよんぼり</sup>然と格子戸の外に立てば、家内<sup>うち</sup>  
 には父親が相かはらずの高声、いはば私<sup>わし</sup>も福人<sup>ふくじん</sup>の一人、  
 いづれも柔順<sup>おとな</sup>しい子供を持つて育てるに手は懸<sup>かか</sup>らず人に  
 は褒められる、分外の欲さへ渴<sup>かわ</sup>かねばこの上に望みもな

し、やれやれ有難い事と物がたられる、あの相手は定め  
 し母様ははさん、ああ何も御存じなしにあのやうに喜んでお出遊いで  
 ばす物を、どの顔さげて離縁状もらふて下されと言はれ  
 た物か、叱かれるは必定、太郎と言ふ子もある身にて  
 置いて駆け出して来るまでには種々いろいろ思案もし尽しての後のち  
 なれど、今更にお老人としよりを驚かしてこれまでの喜びを水の  
 泡あわにさせまする事つらや、寧いっそ話さずに戻ろうか、戻れ  
 ば太郎の母と言はれて何時いつ々々いつまでも原田の奥様、御両  
 親に奏任の聳むこがある身と自慢させ、私わたしさへ身を節つ儉めれ  
 ば時たまはお口に合ふ物お小遣こづかひも差あげられるに、思

ふままを通して離縁とならば太郎には継母ままははの憂き目を見  
 せ、御両親には今までの自慢の鼻にはかに低くさせまし  
 て、人の思はく、弟おととの行末、ああこの身一つの心から  
 出世の真しんも止めずはならず、戻らうか、戻らうか、あの  
 鬼のやうな我良人わがつまのもとに戻らうか、あの鬼の、鬼の良人つま  
 のもとへ、ゑゑ厭いや厭いやと身をふるはす途端、よろよろ  
 として思はず格子にがたりと音さすれば、誰れだと大き  
 く父親の声、道ゆく悪太郎の悪戯いたづらとまがへてなるべし。  
 外なるはおほほと笑ふて、お父様とっさん私で御座んすといか  
 にも可愛かわゆき声、や、誰れだ、誰れであつたと障子ひきあけを引明

て、ほうお関せきか、何だなそんな処ところに立つてゐて、どうして又このおそくに出かけて来た、車もなし、女中も連れずか、やれやれま早く中へ這はい入れ、さあ這入れ、どうも不意に驚かされたやうでまごまごするわな、格子は閉めずとも宜よい私わしが閉める、ともかくも奥おくが好いい、ずつとお月様のさす方へ、さ、蒲団ふとんへ乗れ、蒲団へ、どうも畳が汚ないので大屋に言つては置いたが職人の都合があると言ふてな、遠慮も何も入らない着物がたまらぬからそれを敷ひてくれ、やれやれどうしてこの遅くに出て来たお宅うちでは皆お変りもなしかと例いっに替らずもてはやさるれ



ば、針の席むしろにのる様にて奥さま扱かひ情なくじつと涕なみだ  
 を吞込のみこんで、はい誰れも時候の障さわりも御座りませぬ、私は  
 申まをしわけ 訳のない御無沙汰してをりましたが貴君あなたもお母様つかさんも  
 御機嫌よくいらつしやりますかと問へば、いやもう私わしは  
 嚏くさみ 一つせぬ位、お袋は時たま例の血の道と言ふ奴を始  
 めるがの、それも蒲団かぶつて半日も居ればけろけろと  
 する病だから子細はなしさと元氣からからよく呵々どちらと笑ふに、  
 亥之ゑのさんが見えませぬが今晚は何処どちらへか参りましたか、  
 あの子も替らず勉強で御座んすかと問へば、母親はほた  
 ほたとして茶を進めながら、亥之は今しがた夜学に出て

行ゆました、あれもお前まへお蔭かげさまでこの間は昇給させて頂  
いたし、課長様かちょうが可愛かわいがつて下さるのでどれ位心丈夫で  
あらう、これと言ふもやつぱり原田さんの縁引えんひが有るか  
らだとして宅うちでは毎日いひ暮してゐます、お前に如才は有  
るまいけれどこの後ごとも原田さんの御機嫌ごきげんの好いやう  
に、亥之はあの通り口の重い質たちだし何れお目に懸つても  
あつけない御挨拶ごあいさつよりほか出来まいと思はれるから、何  
分ともお前まへが中に立つて私どもの心が通じるやう、亥之  
が行末まへをもお頼みたま申まをて置いておくれ、ほんに替り目で陽  
気が悪いけれど太郎たろうさんは何時いつも悪戯おいたをしてゐますか、

何故なげに今夜は連れてお出いででない、お祖父ぢいさんも恋しがつ  
 てお出なされた物と言はれて、又今更にうら悲しく、  
 連れて来やうと思ひましたけれどあの子は宵まどひでも  
 う疾とうに寐ねましたからそのまま置いて参りました、本当  
 に悪戯いたづらばかりつのりまして聞わけとては少しもなく、外  
 へ出れば跡を追ひまするし、家内うちに居れば私の傍ばつか  
 り覗ねらふて、ほんにほんに手が懸つて成ませぬ、何故あ  
 なで御座りませうと言ひかけて思ひ出しの涙むねの中に  
 漲みなぎるやうに、思ひ切つて置いては来たれど今頃は目を  
 覚して母かかさん母さんと婢女をんなどもを迷惑がらせ、煎餅おせんやお

こしの宜たらしも利きかで、皆々手を引いて鬼に喰おどはすと威おどかしてでもゐやう、ああ可愛ふたおやさうな事をと声たてても泣きたきを、さしも両親ふたおやの機嫌いよげなるに言いひ出いでかねて、烟けむりにまぎらす烟草たばこ二三服、空咳からせきこんこんとして涙を襦じゆばん袷あのかくしぬ。

今宵は旧曆の十三夜、旧弊なれどお月見の真似事に団子いじいしをこしらへてお月様にお備へ申せし、これはお前も好物なれば少々なりとも亥之助に持たせて上やうと思ふたれど、亥之助も何か極きまりを悪あるがつてその様な物はお止よしなされと言ふし、十五夜にあげなかたつきみんだから片月見に成

つても悪るし、喰べさせたいと思ひながら思ふばかりで  
 上る事が出来なんだに、今夜来てくれるとは夢の様な、  
 ほんに心が届いたのであらう、自宅うちで甘い物うまはいくらも  
 喰べやうけれど親のこしらいたは又別物、奥様気を取す  
 てて今夜は昔しのお関になつて、見得を搆かまはず豆なり栗  
 なり気に入つたを喰べて見せておくれ、いつでも父様ととさんと  
 噂うわさすること、出世は出世に相違なく、人の見る目も立  
 派なほど、お位の宜いい方々や御身分のある奥様がたとの  
 御交際おつきあひもして、ともかくも原田の妻と名告なのつて通るには気  
 骨の折れる事もあらう、女子をんなどもの使ひやう出入りの者

の行渡り、人の上に立つものはそれだけに苦勞が多く、  
 里方がこの様な身柄では猶更なほさらのこと人に侮あなどられぬやう  
 の心懸けもしなければ成るまじ、それを種々さまざまに思ふて見  
 ると父さんとことだとして私だとして孫なり子なりの顔の見たいは  
 当あたりまへ然なれど、余あんまりうるさく出入りをしてはと控へられ  
 て、ほんに御門の前を通る事はありとも木綿着物に毛け  
 繻子じゆすの洋傘かふもりさした時には見す見すお二階すだれの簾を見なが  
 ら、吁あゝお関は何をしてゐる事かと思ひやるばかり行過ゆきすぎ  
 てしまひまする、実家でも少し何とか成つてゐたならば  
 お前の肩身も広からうし、同じくでも少しは息のつけや

う物を、何を云ふにもこの通り、お月見の団子いしをあげやうにも重箱おじゆうからしてお恥かしいでは無からうか、ほんにお前の心遣ひが思はれると嬉しき中にも思ふままの通路が叶かなはねば、愚痴の一トつかみ賤いやしき身分を情なげに言はれて、本当に私は親不孝だと思ひまする、それは成程和やはらかひ衣類きものきて手車てぐるまに乗りあるく時は立派らしくも見えませうけれど、父ととさんや母かかさんにかうして上やうと思ふ事も出来ず、いはば自分の皮一重、寧いっそ賃仕事してもお傍で暮した方が余よつぽど快よう御座いますと言ひ出すに、馬鹿、馬鹿、その様な事を仮にも言ふてはならぬ、

嫁に行つた身が実家さとの親の貢をするなどと思ひも寄らぬこと、家うちに居る時は齋藤の娘、嫁入つては原田の奥方ではないか、勇いさむねさんの氣に入る様にして家の内を納めてさへ行けば何の子細は無い、骨が折れるからとてそれだけの運のある身ならば堪へられぬ事は無い筈、女などと言ふ者はどうも愚痴で、お袋などがつまらぬ事を言ひ出すから困り切る、いやどうも団子を喰べさせる事が出来ぬとて一日大立腹であつた、大分熱心こしらへで調製したものと見えるから十分に喰べて安心させて遣つてくれ、余程甘うまからうぞと父親てておやの滑稽おどけを入れるに、再び言ひそびれて御馳



走の栗枝豆ありがたく頂戴をなしぬ。

嫁入りてより七年の間、いまだに夜よに入りて客に來し  
 こともなく、土産もなしに一人歩行あるきして來るなど悉しつかい皆た  
 めしのなき事なるに、思ひなししか衣類いつもも例ほど燦きらびやか  
 ならず、稀まれに逢ひたる嬉しさにさのみは心も付かざりし  
 が、聳よりの言伝とて何一言の口上もなく、無理に笑顔  
 は作りながら底に萎しほれし処のあるは何か子細のなくては  
 叶ててはず、父親おやは机の上の置時計を眺めて、これやモウ程  
 なく十時になるが関は泊つて行つて宜よいのかの、歸るな  
 らばもう歸らねば成るまいぞと氣を引いて見る親の顔、

娘は今更のやうに見上げて御父様おとつさんわたくし 私わたしは御願ひがあつて出たので御座ります、どうぞ御聞遊してときつとなつて畳に手を突く時、はじめで一トしづく幾層いくその憂きを洩しそめぬ。

父は穩かならぬ色を動かして、改まつて何かのと膝ひざを進めれば、私わたしは今宵限り原田へ歸らぬ決心で出て参つたので御座ります、勇が許しで参つたのではなく、あの子を寐ねかして、太郎を寐かして、最早もあ顔を見ぬ決心で出て参りました、まだ私の手より外誰れの守りでも承諾しょうちせぬほどのあの子を、欺だまして寐かして夢の中うちに、

私<sup>わたくし</sup>は鬼に成つて出て参りました、御父様<sup>おとつさん</sup>、御母様<sup>おつかさん</sup>、察  
 して下さりませ私は今日まで遂ひに原田の身に就いて御  
 耳に入れました事もなく、勇と私<sup>なか</sup>との中を人に言ふた事  
 は御座りませぬけれど、千度<sup>ちたび</sup>も百度<sup>ももたび</sup>も考へ直して、二年  
 も三年も泣<sup>なき</sup>尽<sup>つく</sup>して今日といふ今日どうでも離縁を貰ふて  
 頂かうと決心の臍<sup>ほぞ</sup>をかためました、どうぞ御願ひで御座  
 ります離縁の状を取つて下され、私はこれから内職なり  
 何なりして亥之助が片腕にもなられるやう心がけますほ  
 どに、一生一人で置いて下さりませとわつと声たてるを  
 噛<sup>かみ</sup>しめる襦袢の袖、墨絵の竹も紫竹<sup>しちく</sup>の色にや出ると哀れ

なり。

それはどういふ子細でと父も母も詰寄つて問かかるに  
 今までは黙つてゐましたれど私の家のうち夫婦めをとさし向ひを半  
 日見て下さつたら大底が御解りに成ませう、物言ふは用  
 事のある時けんどん慳まをしに申つけられるばかり、朝起まして機  
 嫌をきけば不ふ凶と脇を向ひて庭の草花を態わざとらしき褒ほめ  
 詞ことば、これにも腹はたてども良人おつとの遊ばす事なればと我  
 慢して私は何も言葉あらそひひした事も御座んせぬけれ  
 ど、朝飯あさはんあがる時から小言は絶えず、召使の前にて散散  
 と私が身の不器用不作法を御並べなされ、それはまだま

だ辛棒もしませうけれど、二言目には教育のない身、教育のない身と御蔑おさげすみなさる、それは素もとより華族女学校の椅子にかかつて育つた物ではないに相違なく、御同僚の奥様がたの様にお花のお茶の、歌の画のと習ひ立てた事もなければその御話しの御相手は出来ませぬけれど、出来ずは人知れず習はせて下さつても済むべき筈、何も表向き実家の悪るいを風聴ふうちようなされて、召使ひの婢女をんなどもに顔の見られるやうな事なさらずとも宜かりさうなもの、嫁入つて丁度半年ばかりの間は関や関やと下へも置かぬやうにして下さつたけれど、あの子が出来てからと

言ふ物はまるで御人が変りました、思ひ出しても恐ろし  
 う御座ります、私はくら暗やみの谷へ突落されたやうに暖か  
 い日の影といふを見た事が御座りませぬ、はじめの中は  
 何か串じょうだん談わざに態とらしく邪慳じゃけんに遊ばすのと思ふてをりま  
 したけれど、全くは私に御飽きなされたのでこうもした  
 ら出てゆくか、ああもしたら離縁をと言ひ出すかと苦いぢめ  
 て苦めて苦め抜くので御座りましたよ、御父様も御母様も  
 私わたしの性分は御存じ、よしや良人が芸者狂ひなさらうと  
 も、困こい者して御置きなさらうともそんな事に恪りんき気する  
 私でもなく、侍婢をんなどもからそんな噂も聞えまするけれど

あれほど働きのある御方なり、男の身のそれ位はありうちと他<sup>よそ</sup>処<sup>ゆき</sup>行には衣<sup>めしもの</sup>類にも気をつけて気に逆らはぬやう心がけておりまするに、唯もう私の為<sup>す</sup>る事とては一から十まで面白くなく覚しめし、箸<sup>はし</sup>の上げ下<sup>おろ</sup>しに家の内の楽しくないは妻が仕方が悪るいからだと仰<sup>おつ</sup>しやる、それもどういふ事が悪い、此<sup>ここ</sup>処<sup>こ</sup>が面白くないと言ひ聞かして下さる様ならば宜けれど、一筋につまらぬくだらぬ、解らぬ奴、とても相談の相手にはならぬの、いはば太郎の乳母として置いて遣<sup>つか</sup>はすのと嘲<sup>あざけ</sup>つて仰しやるばかり、ほんに良人といふではなくあの御方は鬼で御座りまする、御

自分の口から出てゆけとは仰しやりませぬけれど私がこ  
 の様な意久地なしで太郎の可愛かわゆさに気が引かれ、どうで  
 も御詞に異背せず唯々はいはいと御小言を聞いておりますれば、  
 張はりも意気地もない愚うたらの奴、それからして氣に入ら  
 ぬと仰しやりまする、さうかと言つて少しなりとも私の  
 言いひじよう条を立てて負けぬ氣に御返事をしましたらそれを取とつ  
 てに出てゆけと言はれるは必定、私は御母様出て来るの  
 は何でも御座んせぬ、名のみ立派の原田勇に離縁された  
 からとて夢さら残りをしいとは思ひませぬけれど、何に  
 も知らぬあの太郎が、片親に成るかと思ひますると意地



もなく我慢もなく、詫わびて機嫌を取つて、何でも無い事に  
 恐れ入つて、今日までも物言はず辛棒してをりました、  
 御父様、御母様、私は不運で御座りますとて口惜くやしさ悲  
 しき打出うちいし、思ひも寄らぬ事を談かたれば両親ふたおやは顔を見合せ  
 て、さてはその様の憂なき中かなかと呆あれて暫時しばしいふ言もなし。  
 母親は子に甘きならひ、聞ことごとく毎々に身にしみて口惜くちをし  
 く、父様ととさんは何おほと思し召すか知らぬが元来もともと此方こちから貰ふて  
 下されと願ふて遣つた子ではなし、身分が悪いの学校が  
 どうしたのと宜くも宜くも勝手な事が言はれた物、先方さき  
 は忘れたかも知らぬが此方こちらはたしかに日まで覚えてゐ

る、阿おせき関が十七の御正月、まだ門松を取もせぬ七日の朝  
 の事であつた、旧もとの猿ざる楽がくちよう町のあうちの家うちの前ちいさいので御隣ちいさいのの小娘  
 と追羽根して、あの娘の突いた白い羽根が通り掛つた原  
 田さんの車の中へ落たとつて、それをば阿関が貰ひに行  
 きしに、その時はじめて見たとか言つて人橋かけてやい  
 やいと貰ひたがる、御身分がらにも釣合ひませぬし、此方こちら  
 はまだ根つからの子供で何も稽古事も仕込んで置ませ  
 ず、支度とても唯今の有様で御座いますからとて幾度いくたび断  
 つたか知れはせぬけれど、何も舅しうとしうとめ姑しうとしうとめのやかましいが  
 有るでは無し、我わしが欲しくて我が貰ふに身分も何も言ふ

事はない、稽古は引取つてからでも充分させられるから  
その心配も要いらぬ事、とかくくれさへすれば大事にして  
置かうからとそれはそれは火のつく様に催促して、此方  
から強請ねだつた訳ではなけれど支度まで先方さきで調へて謂いはば  
御前は恋女房、私や父様ととさんが遠慮してさのみは出入りをせ  
ぬといふも勇さんの身分を恐れてでは無い、これが妾めかけ  
手かけに出したのではなし正しょうとう当にも正當にも百まん  
ら頼みによこして貰つて行つた嫁の親、大威張に出這入  
しても差つかへは無けれど、彼方あちらが立派にやつてゐるに、  
此方がこの通りつまらぬ活計くらしをしてゐれば、御前の縁に

すがつて聳むこの助力たすけを受けもするかと他人ひと様の処思おもはくが口惜くちをしく、瘦やせ我慢では無けれど交際つきあひだけは御身分相応に尽して、平常へいぜいは逢あいたい娘の顔も見ずにゐます、それをば何の馬鹿々々しい親なし子でも拾つて行つたやうに大層らしい、物が出来るの出来ぬのと宜くそんな口が利けた物、黙つてゐては際限もなく募つてそれはそれは癖くせに成つてしまひます、第一は婢女をんなどもの手前奥様の威光が削そげて、末には御前の言ふ事を聞く者もなく、太郎を仕立るにも母様ははさんを馬鹿にする気になられたら何としまする、言ふだけの事はきつと言ふて、それが悪ると小言

をいふたら何の私にも家が有ますとて出て来るが宜から  
 うでは無いか、ほん実に馬鹿々々しいとつてはそれほどの事  
 を今日が日まで黙つてゐるといふ事が有ります物か、余あんま  
 り御前が温順おとなし過るから我儘わがままがつのられたのである、聞  
 いたばかりでも腹が立つ、もうもう退ひけてゐるには及び  
 ません、身分が何であらうが父もある母もある、年はゆ  
 かねど亥之助といふ弟おとともあればその様な火の中にじつ  
 としてゐるには及ばぬこと、なあ父様ととさん一遍勇さんに逢ふ  
 て十分油を取つたら宜う御座りましよと母は猛たけつて前後  
 もかへり見ず。

てておや  
 父親は先刻より腕ぐみして目を閉ぢて有けるが、ああ  
 さきほど  
 御袋、無茶の事を言ふてはならぬ、我し<sup>わ</sup>さへ始めて聞い  
 てどうした物かと思案にくれる、阿関<sup>おせき</sup>の事なれば並大底  
 でこんな事を言ひ出しさうにもなく、よくよく愁<sup>つ</sup>らさに  
 出て来たと見えるが、して今夜は聳<sup>る</sup>どのは不在<sup>す</sup>か、何か  
 改たまつての事件でもあつてか、いよいよ離縁する<sup>と</sup>で  
 も言はれて来たのかと落ついて問ふに、良人<sup>おつと</sup>は一昨日<sup>おととひ</sup>よ  
 り家へとては歸られませぬ、五日六日と家を明けるは  
 平常<sup>つね</sup>の事、さのみ珍らしいとは思ひませぬけれど出際<sup>できは</sup>に  
 召物の揃<sup>そろ</sup>へかたが悪いとて如何<sup>いか</sup>ほど詫びても聞入れがな

く、其品それをば脱いで擲たきつけて、御自身洋服にめしかへ  
 て、吁ああ、私位くらゐ不仕合の人間はあるまい、御前のやうな  
 妻を持つたのはと言ひ捨てに出で御出で遊しました、何  
 といふ事で御座りませう一年三百六十五日物いふ事も無  
 く、稀々たまたま言はれるはこの様な情ない詞をかけられて、そ  
 れでも原田の妻と言はれたいか、太郎の母で候きふらふと顔お  
 し拭つてゐる心か、我身ながら我身の辛棒がわかりませ  
 ぬ、もうもうもう私は良人つまも子も御座んせぬ嫁入せぬ昔  
 しと思へばそれまで、あの頑是ない太郎の寝顔を眺めな  
 がら置いて来るほどの心になりましたからは、もうどう

でも勇の傍に居る事は出来ませぬ、親はなくとも子は育つと言ひまするし、私の様な不運の母の手で育つより継母御なり御手かけなり気に適かなふた人に育てて貰ふたら、少しは父御も可愛かわゆがつて後々あの子の為にも成ませう、私はもう今宵かぎりどうしても帰る事は致しませぬとて、断つても断てぬ子の可憐かわゆさに、奇麗に言へども詞はふるへぬ。

父は歎息して、無理は無い、居ゐ愁づらくもあらう、困つた中に成つたものよと暫時阿関しばらくおせきの顔を眺めしが、大丸鬚おほまるまげに金輪きんわの根を巻きて黒縮緬くろちりめんの羽織何の惜しげもなく、我



が娘ながらもいつしか調ふ奥様風、これをば結び髪に結  
 びかへさせて綿銘仙めんめいせんの半天たすきに襷たすきがけの水仕業みづしわざさする事  
 いかにして忍ばるべき、太郎といふ子もあるものなり、  
 一端の怒りに百年の運を取はずして、人には笑はれもの  
 となり、身はいにしへの斎藤主計かずへが娘に戻らば、泣くと  
 も笑ふとも再度ふたたび原田太郎が母とは呼ばるる事成るべきに  
 もあらず、良人おつとに未練は残さずとも我が子の愛の断ちが  
 たくは離れていよいよ物をも思ふべく、今の苦勞を恋し  
 がる心も出づべし、かく形よく生れたる身の不幸ふしやはせ、不  
 相応の縁につながれて幾らの苦勞をさす事と哀れさの

増れども、いや阿闍あまこう言ふと父が無慈悲で汲取くみとつてくれぬのと思ふか知らぬが決して御前を叱しかるではない、身分が釣合はねば思ふ事も自然違ふて、此方こちらは真しんから尽す気でも取りやうに寄つては面白くなく見える事もあらう、勇さんだからとてあの通り物の道理を心得た、利発の人ではあり随分学者でもある、無茶苦茶にいぢめ立てる訳ではあるまいが、得て世間に褒め物の敏腕家はたらきてなどと言はれるは極めて恐ろしい我まま物、外では知らぬ顔に切つて廻せど勤め向きの不平などまで家内うちへ歸つて当りちらされる、的に成つては随分つらい事もあらう、なれど

もあれほどの良人を持つ身のつとめ、区役所がよひの腰  
弁当が釜の下を焚たきつけてくれるのとは格が違ふ、随したが  
つてやかましくもあらうむづかしくもあろうそれを機嫌  
の好い様にととのへて行くが妻の役、表面うわべには見えねど  
世間の奥様といふ人達の何いづれも面白くをかしき中ばかり  
は有るまじ、身一つと思へば恨みも出る、何のこれが世  
の勤めなり、殊にはこれほど身がらの相違もある事なれ  
ば人一倍の苦もある道理、お袋などが口広い事は言へど  
亥之が昨今の月給に有ついたも必ひつきよう竟は原田さんの口入  
れではなからうか、七光どころか十光とひかりもして間接よそながら

の恩を着ぬとは言はれぬに愁<sup>つ</sup>らからうとも一つは親の為<sup>おとと</sup>  
 弟<sup>おとと</sup>の為、太郎といふ子もあるものを今日までの辛棒が  
 なるほどならば、これから後<sup>ご</sup>とて出来ぬ事はあるまじ、  
 離縁を取つて出たが宜<sup>よ</sup>いか、太郎は原田のもの、其<sup>そ</sup>方は  
 斎藤の娘、一度縁が切れては二度と顔見にゆく事もなる  
 まじ、同じく不運に泣くほどならば原田の妻で大泣きに  
 泣け、なあ関さうでは無いか、合<sup>が</sup>点<sup>てん</sup>がいつたら何事も胸  
 に納めて、知らぬ顔に今夜は歸つて、今まで通りつつし  
 んで世を送つてくれ、お前が口に出さんとても親も察し  
 る弟も察する、涙は各自<sup>てんで</sup>に分<sup>わけ</sup>て泣かうぞと因果を含めて

これも目を拭ふに、阿関はわつと泣いてそれでは離縁を  
といふたも我ままで御座りました、成程太郎に別れて顔  
も見られぬ様にならばこの世に居たとて甲斐かもないもの  
を、唯目ただの前の苦をのがれたとてどうなる物で御座んせ  
う、ほんに私さへ死んだ気にならば三方四方波風たたず、  
ともあれあの子も両親の手で育てられまするに、つまら  
ぬ事を思ひ寄よりまして、貴君にまで嫌いやな事を御聞かせ申  
ました、今宵限り関はなくなつて魂一つがあの子の身を  
守るのと思ひますれば良人のつらく当る位百年も辛棒出  
来さうな事、よく御言葉も合点が行きました、もうこん

な事は御聞かせ申ませぬほどに心配をして下さりますな  
 とて拭ふあとから又涙、母親は声たてて何といふこの娘  
 は不仕合と又一しきり大泣きの雨、くもらぬ月も折から  
 淋しくて、うしろの土手の自然生しぜんばへを弟の亥之が折て来て、  
 瓶びんにさしたる薄すすきの穂の招く手振りも哀れなる夜なり。

実家は上野の新坂下、駿河台するがだいへの路なれば茂れる森の  
 木このした暗侘やみわびしけれど、今宵は月もさやかかなり、広小路ひろこうぢ  
 へ出ればいづ昼も同様、雇ひつけの車宿とて無き家なれば路みち  
 ゆく車を窓から呼んで、合点が行つたらともかくも帰れ、  
 主人あるじの留守に断ことわりなしの外出、これを咎とがめられるとも申

訳の詞は有るまじ、少し時刻は遅れたれど車ならばつひ  
 一ト飛とび、話しは重ねて聞きに行かう、先まづ今夜は歸つて  
 くれとて手を取つて引出ひきいすやうなるも事あら立だじの親の  
 慈悲、阿関はこれまでの身と覚悟してお父様とっさん、お母様つかさん、  
 今夜の事はこれ限り、歸りまするからは私は原田の妻な  
 り、良人を誹そしるは濟みませぬほどにもう何も言ひませぬ、  
 関は立派な良人を持つたので弟の為にも好い片腕、ああ  
 安心なと喜んでみて下されば私は何も思ふ事は御座んせ  
 ぬ、決して決して不了簡など出すやうな事はしませぬほ  
 どにそれも案じて下さりますな、私の身体からだは今夜をはじ

めに勇のものだと思ひまして、あの人の思ふままに何となりして貰ひましょ、それではもう私は戻ります、亥之さんが帰つたらば宜しくいふて置いて下され、お父様もお母様も御機嫌よう、この次には笑ふて参りますとて是非なささうに立あがれば、母親は無けなしの巾着さげて出て駿河台まで何程でゆくと門なる車夫に声をかくるを、あ、お母様それは私がやります、有がたう御座んしたと温順しく挨拶して、格子戸くぐれば顔に袖、涙をかくして乗り移る哀れさ、家には父が咳払ひのこれもうるめる声成し。



## 下

さやけき月に風のおと添ひて、虫の音ねたえだえに物が  
なしき上野へ入りてよりまだ一町もやうやうと思ふに、  
いかにしたるか車夫はびつたりと轅かぢを止めて、誠に申か  
ねましたが私はこれで御免を願ひます、代は入りませぬ  
からお下りおなすつてと突然だしぬけにいはれて、思ひもかけぬ事  
なれば阿関は胸をどつきりとさせて、あれお前そんな事  
を言つては困るではないか、少し急ぎの事でもあり増し

は上げやうほどに骨を折つておくれ、こんな淋しい処では代りの車も有るまいではないか、それはお前人困らせといふ物、愚図らずに行つておくれと少しふるへて頼むやうに言へば、増しが欲しいと言ふのでは有ませぬ、私からお願ひですどうぞお下りなすつて、もう引くのが厭やに成つたので御座りますと言ふに、それではお前加減でも悪るいか、まあどうしたと言ふ訳、此処ここまで挽ひいて来て厭やに成つたでは済むまいがねと声に力を入れて車夫を叱れば、御免なさいまし、もうどうでも厭やに成つたのですからとて提ちようちん燈もちを持しまま不図脇へのがれて、

お前は我ままの車夫さんくるまやだね、それならば約定きめの処までとは言ひませぬ、代りのある処まで行つてくれればそれでよし、代はやるほどに何処か瓦そこ処らまで、切せめて広小路まで行つておくれと優しい声にすかす様にいへば、なるほど若いお方ではありこの淋しい処へおろされては定めしお困りなさりませう、これは私が悪う御座りました、ではお乗せ申ませう、お供を致わしませう、さぞお驚きなさりましたろうとて悪者わるらしくもなく提燈を持かゆるに、お関もはじめて胸をなで、心丈夫に車夫の顔を見れば二十五六の色黒く、小男の瘦やせぎす、あ、月に背そむけ

たあの顔が誰れたやらで有つた、誰れやらに似てゐると人の名も咽元のどもとまで転ころがりながら、もしやお前さんはと我知らず声をかけるに、ゑ、と驚いて振あふぐ男、あれお前さんはあのお方では無いか、私をよもお忘れはなさるまいと車より凜すべるやうに下りてつくづくと打まもれば、貴嬢あなたは斎藤の阿関さん、面目も無いこんな姿なりで、背後うしろに目が無ければ何の気もつかずにいました、それでも音声ものごゑにも心づくべき筈なるに、私は余程よつほどの鈍に成りましたと下を向いて身を恥れば、阿関は頭つむりの先より爪先つまさきまで眺めてゐるゑ私だとして往来で行逢ふた位ではよもや貴君あなた

と気は付きますすまい、唯たつた今の先までも知らぬ他人の  
くるまや車夫さんとのみ思ふてゐましたに御存じないは当然あたりまへ、  
もつたい勿体ない事であつたれど知らぬ事なればゆるして下さ  
れ、まあ何時いつからこんな業ことして、よくそのか弱い身に障  
りもしませぬか、伯母さんが田舎へ引取られてお出いでなさ  
れて、小川町をがはまちのお店みせをお廃やめなされたといふ噂うわさは他処よそ  
ながら聞いてもゐましたれど、私も昔しの身でなければ  
種々いろいろと障る事があつてな、お尋ね申すは更なること手紙  
あげる事も成ませんかつた、今は何処に家を持つて、お  
内儀かみさんも御健勝おまめか、小兒ちっさいのも出来てか、今も私は折ふ

し小川町の勸工場見物かんこうばみに行ゆきまする度々たびたび、旧もとのお店がそつ  
 くりそのまま同じ烟草店たばこみせの能登のとやといふに成つてゐます  
 るを、何時通つても覗のぞかれて、ああ高坂こうさかの録ろくさんが子供  
 であつたころ、学校の行返ゆきもどりに寄つては巻烟草のこぼれ  
 を貰ふて、生意氣らしう吸立てた物なれど、今は何処に  
 何をして、気の優しい方なればこんなむづかしい世にど  
 のやうの世渡りをしてお出いでならうか、それも心にかかり  
 まして、実家へ行く度に御様子ごようすを、もし知つてもあるか  
 と聞いては見まするけれど、猿楽町ざるがくちようを離れたのは今で  
 五年の前、根つからお便りを聞く縁がなく、どんなにお

懐しう御座んしたらうと我身のほどをも忘れて問ひかくれば、男は流れる汗を手拭にぬぐふて、お恥かしい身に落まして今は家うちと言ふ物も御座りませぬ、寐処は浅草町の安宿、村田といふが二階に転がつて、氣に向ひた時は今夜のやうに遅くまで挽く事もありますし、厭やと思へば日がな一日ごろごろとして烟けぶりのやうに暮してゐまする、貴嬢あなたは相変らずの美しくしさ、奥様にお成りなされたと聞いた時からそれでも一度は拜む事が出来るか、一生の内に又お言葉を交はす事が出来るかと夢のやうに願ふてゐました、今日までは入用いりようのない命と捨て物に取あ

つかふてゐましたけれど命があればこそその御対面、ああ  
 宜く私わたくしを高坂の録之助ろくのすけと覚えてゐて下さりました、  
 辱かたじけなう御座りますと下を向くに、阿関はさめざめとし  
 て誰れも憂き世に一人と思ふて下さるな。

してお内儀かみさんはと阿関の間へば、御存じで御座りま  
 しょ筋向ふの杉田やが娘、色が白いかか恰好かつこうがどうだと  
 か言ふて世間の人は暗雲やみくもに褒めたた女もので御座ります、  
 私が如何いかにも放蕩のらをつくして家へとは寄りつかぬやう  
 に成つたを、貰ふべき頃に貰ふ物を貰はぬからだだと親類  
 の中の解らずやが勘違ひして、あれならばと母親が眼鏡



にかけ、是非もらへ、やれ貫へと無茶苦茶に進めたてる  
五月蠅うるささ、どうなりと成れ、成れ、勝手に成れとてあれ  
を家へ迎へたは丁度貴嬢が御懐妊だと聞きました時分の  
事、一年目には私が処にもお目出たうを他人ひとからは言は  
れて、犬張子や風車を並べたてる様に成りましたれど、  
何のそんな事で私が放蕩のらのやむ事か、人は顔の好い女房  
を持たせたら足が止まるか、子が生れたら気が改まるか  
とも思ふてみたのであらうなれど、たとへ小町と西施せいしと  
手を引いて来て、衣通そとほり姫が舞ひを舞つて見せてくれても  
私の放蕩のらは直らぬ事に極めて置いたを、何で乳くさい子

供の顔見て発心ほっしんが出来ませう、遊んで遊んで遊び抜いて、  
 呑んで呑んで呑み尽して、家も稼業かぎようもそつち除のけに箸はし一  
 本もたぬやうに成つたは一昨々年さきおとし、お袋は田舎へ嫁入つ  
 た姉の処に引取つて貰ひまするし、女房にようぼは子をつけて  
 実家さとへ戻したまま音信不通、女の子ではあり惜しいとも  
 何とも思ひはしませぬけれど、その子も昨年の暮チプス  
 に懸つて死んださうに聞きました、女はませな物ではあり、  
 死ぬ際ぎはには定めし父様ととさんとか何とか言ふたので御座りまし  
 よう、今年居れば五つになるので御座りました、何のつ  
 まらぬ身の上、お話しにも成りませぬ。

男はうす淋しき顔に笑みを浮べて貴嬢といふ事も知りませぬので、飛んだ我ままの不調法、さ、お乗りなされ、お供をしまする、さぞ不意でお驚きなさりましたろう、車を挽くと言ふも名ばかり、何が楽しみに轆棒かぢぼうをにぎつて、何が望みに牛馬うしうまの真似をする、銭ぜにを貰へたら嬉しいか、酒が呑まれたら愉快なか、考へれば何もかも悉皆しつがい厭やで、お客様を乗せやうが空車からの時だらうが嫌やとなると用捨なく嫌やに成まする、呆あきれはてる我まま男、愛想あいそが尽きるでは有りませぬか、さ、お乗りなされ、お供をしますと進められて、あれ知らぬ中うちは仕方もなし、知つ

て其車それに乗れます物か、それでもこんな淋しい処を一人  
 ゆくは心細いほどに、広小路へ出るまで唯道づれに成つ  
 て下され、話しながら行ゆきませうとてお関は小棲こづま少し引あ  
 げて、ぬり下駄のおとこれも淋しげなり。

昔の友といふ中にもこれは忘れぬ由縁ゆかりのある人、小  
 川町の高坂とて小奇麗な烟草屋たばこやの一人息子、今はこの様  
 に色も黒く見られぬ男になつてはゐれども、世にある頃  
 の唐棧とうざんぞろひに小氣の利いた前だれがけ、お世辞てておやも上手、  
 愛敬もありて、年の行かぬやうにも無い、父親てておやの居た時  
 よりは却かへつて店が賑にぎやかなと評判された利口らしい人

の、さてもさてももの替り様、我身が嫁入りの噂聞え初そめた  
 頃から、やけ遊びの底ぬけ騒ぎ、高坂の息子はまるで人  
 間が變つたやうな、魔でもさしたか、祟たたりでもあるか、  
 よもや只事では無いとその頃に聞きしが、今宵見れば如  
 何にも浅ましい身の有様、木賃泊りに居なさんすやうに  
 成らうとは思ひも寄らぬ、私はこの人に思はれて、十二  
 の年より十七まで明暮れ顔を合せる毎たびに行々ゆくゆくはあの店の  
 彼処へ座つて、新聞見ながら商ひするのと思ふてもゐた  
 れど、量はからぬ人に縁の定まりて、親々の言ふ事なれば何  
 の異存を入られやう、烟草屋の録さんにはと思へどそれ

はほんの子供ごころ、先方さきからも口へ出して言ふた事はなし、此方こちらは猶なほさら、これは取とまらぬ夢の様な恋なるを、思ひ切つてしまへ、思ひ切つてしまへ、あきらめてしまはうと心を定めて、今の原田へ嫁入りの事には成つたれど、その際きはまでも涙がこぼれて忘れかねた人、私が思ふほどはこの人も思ふて、それ故の身の破滅かも知れぬ物を、我がこの様な丸鬚まるまげなどに、取済とりすましたる様な姿をいかばかり面つらにくく思はれるであらう、夢さらさうした楽しらしい身ではなけれどもと阿閔は振かへつて録之助を見やるに、何を思ふか茫然とせし顔つき、時たま逢ひ

し阿関に向つてさのみは嬉しき様子も見えざりき。

広小路に出れば車もあり、阿関は紙入れより紙幣いくらか取出して小菊の紙にしほらしく包みて、録さんこれは誠に失礼なれど鼻紙なりとも買つて下され、久し振でお目にかかつて何か申たい事は沢山あるやうなれど口へ出ませぬは察して下され、では私は御別れに致します、随分からだを厭ふて煩らはぬ様に、伯母さんをも早く安心させておあげなさりました、蔭ながら私も祈ります、どうぞ以前の録さんにお成りなされて、お立派にお店をお開きに成ります処を見せて下され、左様ならばと挨拶す

れば録之助は紙づつみを頂いて、お辞儀申す筈なれど貴嬢のお手より下されたのなれば、あり難く頂戴して思ひ出にしまする、お別れ申すが惜しいと言つてもこれが夢ならば仕方のない事、さ、お出いでなされ、私も帰ります、更けては路が淋しう御座りますぞとて空からぐるま車引いてうしろ向く、其人それは東へ、此人これは南へ、大路の柳月のかげに靡なびいて力なささうの塗り下駄のおと、村田の二階も原田の奥も憂きはお互ひの世におもふ事多し。







日本文学電子図書館

---

にごりえ・たけくらべ

著 者：樋口一葉

制作者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社

---

日本文学電子図書館